

# HANDSフレンズ

不定期連載HANDSフレンズ。今回は大学生の滝澤くんです。  
卒業論文のため、8月に2週間現地訪問しました。



滝澤 浩一郎（立教大学経済学部4年）

フィリピンに行く前は、島内では内戦が続き、爆弾テロなどが今でも続いているということで、多少の恐怖心を持っていた。確かに街の入り口で軍人が車をチェックしていたり、銃をもった軍人が街にいたり、他島とは異なる緊張感がある。しかし、人自体をみると、フィリピン人のおしゃべり好きなところやチャーミングな笑顔は他島と同じであった。イスラム教でもキリスト教でもなんでも、フィリピン人はフィリピン人なのだと感じられたことは興味深かった。

先住民族が住む山一帯は、禿山になっている山が多い。かつて、木材輸出のために乱伐されたそうで、その輸出先は主に日本ということだった。プランテーションによって輸出されるバナナなどもそうだが、先住民族の暮らしが脅かされている

背景には日本が関係していることを改めて実感することができた。そして、それを知るだけでなく、我々日本人がどういう形で彼らを支援していく必要があるかを考える機会を与えてくれた。

先住民族が暮らすブラクールは、古くから支援を受けて教育が村に根付いており、学校を中心としてコミュニティーが構築されていったことをみると、日本 NGO の HANDS はじめ、サンタクルスミッション、フィリピン NGO の PFP など支援団体による支援が効果的であったことを自分の目で確かめることができた。また、オーガニック農法を取り入れたアグロフォレストリーは持続可能な農業であるので、人にも環境にも優しいという点で、その確立は彼らの自立に大きな手助けになるという点で興味深い。



ブラクールの子どもたちと